

江戸初期における琉英（琉球イギリス）交流の一考察

タイモン・スクリーチ
国際日本文化研究センター
(ロンドン大学ソアッス)

いわゆる南蛮時代から江戸初期にかけて、スペインとポルトガル、その後、オランダとイギリスが日本と貿易をしていたということはよく知られている。しかしヨーロッパの船が本国の港から直接日本の港を目指したわけではない。長い航海の途中では様々な国を経由しながら航海し、何度も港に立ち寄って食物を購入したりしながらその土地と交流したのである。ジャヴァ島やフィリピンはその好例である。ヨーロッパから日本へ向う船にとっては、平戸あるいは長崎に到着する前に最後に通るのが琉球であった。入港せずに通過したこともあったが、石垣島や宮古島、沖縄（現在の沖縄本島）、そして奄美に泊った時もあった。ある説によれば、1552 年から 1553 年に日本にヨーロッパ人を運んできた最初の船は、実は日本ではなく琉球を目指していたという。

残念ながら琉球に来たヨーロッパ船についての記録は決して多くはないが、16 世紀に入るとヨーロッパの地図に琉球が姿を現わし始める。そこでは、現在の八重山諸島は「*ilas dos Reyes Magos*（聖王の島々）」つまり「東方の三博士の島々」と書かれており、沖縄本島は「*Liquea*（琉球）」とされていた。尚、ポルトガル人は特に琉球の扇子を好んでいたようで、現代でもポルトガル語では扇子を「*legue*（琉球）」と呼んでいる。

1613 年になると、イギリス船も日本への航海の途中に石垣島付近を通っているようだ。船長の航海日記によれば、入港しようとしたが嵐が強過ぎて諦めたとある。その船はその後無事に平戸に着いてイギリス商館を設立するのである。イギリスが琉球との貿易目的の航海を考え始めたのはその直後のこと。そして那覇に着いたのが 1615 年、指揮官は有名なウィリアム・アダムス（按針）であった。那覇に 6 ヶ月もの長きに渡って滞在したアダムズは非常に面白い日記を残している。以降二回にわたりイギリス船は那覇に来て（二度とも 1618 年）貿易を行っているのである。